

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第968号 平成27年7月23日

ろくせき こ 六尺の孤を託す

論語に「六尺の孤を託す」という言葉があります。「六尺の孤」即ち「幼い遺児」という事ですが、自分が死んだ後、残された幼い我が子を託すとすれば、託す相手は余程信頼出来る人物でなければなりません。

権勢を誇った豊臣秀吉が亡くなる直前、徳川家康等五大老に対して「秀頼の身が立つように支えて欲しい」と当時6歳であった秀頼の後事を託します。恐らく、秀吉にしてみれば「六尺の孤を託す」という心境であったに違いありません。しかし、結果は皆さんがご承知の通りです。

一体どの様な人物を信頼に足る人物（君子）と呼ぶべきか、この難題に曾子は次のように答えています。

以て六尺の孤を託すべく、以て百里の命を寄すべく、大節に臨んで奪うべからざるなり。

（論語「泰伯第八」から）

つまり、「安心して幼い遺児をあずける事が出来、国政を任せる事が出来、重大な事に臨んでも節を曲げる事のない人」こそ君子、つまり真に信頼出来る人物である（現代語訳「仮名論語」から）、と曾子はいうのです。

私にとって、この定義ですぐに思い浮かぶ人物は、劉備の軍師、諸葛孔明です。

劉備は病のため223年に白帝城で亡くなるのですが、死去に際し、孔明に対して「もし我が子（劉禪）に才能がなければ、君が自ら皇帝となり国を治めてくれ」といいます。これに対し、孔明は「私は劉禪を補佐するため手足となって働く」と答え、生涯にわたってその姿勢を貫きます。

劉備の孔明への信頼が篤かった事は良く分かりますが、孔明はまた劉備の信頼に全身全霊を以て答えたといつて良いでしょう。

さて、我が子を託するというのは、秀吉や劉備のように、自分の死に直面した特別の場合だけでない事は、いうまでもありません。最も身近な事でいえば、保護者と教師との間にも、その関係は生じます。その場合は「六尺の孤」ではなく「六尺の子」という事になる訳ですが、しかし、親として我が子を学校に送り出すというのは、教師に「六尺の子」を託すという心境に外なりません。

これに対して、教師の皆さんには、孔明のように「六尺の子」を託されたという覚悟は果たしてあるでしょうか。その事を、個々の教師の皆さんには再確認して欲しいと思っています。

そういう事からすると、岩手県矢巾町の矢巾北中学校の生徒が自殺した事件は、「六尺の子を託した」保護者の期待と信頼を大きく裏切る結果となり、非常に遺憾に思っています。

特に、学校においては、生徒や保護者は信頼に足る担任を指名する事ができません。生徒や保護者は一方的に担任の教師を信頼するしかないのです。だからこそ、教師は、生徒や保護者の信頼に値するよう最善の努力をしなければならないはずで

す。今回の矢巾北中学校の生徒が自殺した事件では、担任の教師は、生徒が自分を信頼してSOSを発信して来たにもかかわらず、生徒の真意や深刻さを読み取る事が出来ず最悪の事態を招いてしまいました。

いじめを受けている生徒は、教師から事実関係を問われても「自分はいじめられていない」等といじめの事実を隠すケースが多く、今回のように、生徒からいじめの事実が伝えられ、しかも自殺の意思までほのめかすというのはまれだと思います。にもかかわらず、生徒の自殺を止められなかったというのは、担任教師の怠慢（これがいい過ぎなら、踏み込み不足）といわざるを得ません。

何故このような事態になったのか、報道された範囲の事しか分かりませんので、軽々に論じる事は出来ませんが、少なくとも、

- 担任教師のいじめ問題に対する認識の甘さ
 - いじめは学校全体で解決するという、学校の体制の不備
- を指摘して置きたいと思います。

担任教師は、生徒からいじめを受けているという申告があれば、直ちに、事実関係の把握に努めると共に、校長等に報告する等して学校全体で問題を共有するよう行動を起こさなければなりません。また、保護者にも連絡して、学校と保護者が協力して問題解決に当たる姿勢が不可欠です。

報道されている生活記録ノートでの生徒と担任教師とのやり取りを見ると、教師には問題の深刻さについて殆ど認識が無いように感じます。まるで、評論家のようなです。これでは、教師の言葉は何も生徒に響いていなかったのではないかと感じます。

また、校長は自殺した生徒のいじめについて何も知らなかったようですが、そもそもこの学校では、いじめ防止についてどの程度真剣に取り組んでいたのか疑問です。この学校では、あらゆる機会に、いじめ問題は潜んでいないか注意を喚起し、何かあれば直ちに報告するよう学校全体に徹底していたのでしょうか。

また、いじめがあった場合、担任等一部の教師が抱え込む事のないよう、学校全体で取り組む体制は取れていたのでしょうか。

いずれにせよ、今後事実関係が明らかになって行くものと思いますが、「亡くなった生徒の命は決して元に戻らない」という、この重たい現実を我々はしっかりと受け止めなければなりません。

(塾頭 吉田洋一)